

でもな、潮時ってものがある

西 文紀

足立良之介の母公代はデイサービスに通い始めた。きっかけは良之介が以前勤務していた会社の、七歳下の同僚からの誘いだった。同僚は山上房子といい、良之介の家に突然やって来た。母の公代に少し話があると言う。

「あのね、お母様、私のところの『ケアセンターきさらぎ』に今泉真知子さんが通っているの。お母様はご存知ですよね」

「今泉さん？ 真知子さん？ 神田町の？」公代は半信半疑で聞いた。

今泉さんというのは、公代と女学校時代からの付き合いで、もう一人、福田さんという方と三人で、毎年奇数月の第二月曜日に食事を楽しんでた。しかし二年前に福田さんが腎不全で亡くなり、三人の食事会も自然消滅となっていた。

「そうです、そうです。神田町にお住いの今泉さんです」

山上房子は身を乗り出した。



「お互いに年賀状のやり取りもなくなって、電話も、もう最近はかけていないわ。真知子さんはお元気かしら？」
「お元気ですよ。実はね、今泉さんは歴史が大好きで、皆と徳川家康公の話をしていた時、巴川の稚児橋のカッパ伝説に話が及んだんです。その時『私のお友達が稚児橋の近くに住んでいるのよ』と言ったので、私も興味があったし、お名前を尋ねたら『足立公代さんというのよ』っておっしゃったの」
山上房子は一気にしゃべって、出されたお茶をこれも一気に飲み干した。

「まあ、おばあちゃん良かったわね。今泉さんもお元気そうじゃない」

山上房子の湯呑み茶碗に新しいお茶を注ぎながら、良之介の妻秀子は言った。母の公代はただニコニコ聞いているだけで、特に返事もしなかった。

(おばあちゃん、何か考えている)

秀子は普段の生活の中での義母の仕草から感じ取った。このニコニコ顔が曲者なのだ。一見、人のよさそうな老婦人に見える。しかしこの時に刀の柄つかを握っていることがある。

「それでね、今日伺ったのは、今泉さんから『足立さんに声を掛けて、ここに誘ってほしい』と言われたからなの」

母の公代は「まあ」と驚いた。いや、秀子にしてみれば(あれは『驚いた振り』だ)ということになる。

(はっきり柄つかを握ったぞ)

しばらく沈黙が続いた。母も良之介も秀子も、初めて聞いた話題だったからだ。施設に入るとか、施設に通うというのは、高齢齢のため、また何らかの障害があるため、一人では歩行が困難、食事を作れない、取れない、トイレに行けないなどという人たちが対象だと思っていた。

「皆さん、ご返事に困っているようですから、言います」

沈黙を破ったのは山上房子だった。施設の種類には色々あって、定時に来て定時に帰る、いわゆる「通い」を中心にした施設や、宿泊もできる施設、看護・介護が必要な人たちの居宅型の施設があることなどを説明した。

「でね、今泉さんは週三日の通所サービスを受けているの。つまり『通い』ね。火・木・金曜日に通って、午前中は俳句や短歌を詠んだり、歌を歌ったり、ゲームをしたりして過ごすの。お昼ご飯を食べて午後は、週二回お風呂に入ってお昼寝して、ほとんど自宅にいるのと変わらない生活よ。そしてね、ご希望なら二、三日は宿泊も可能なのよ」

山上房子は「ケアセンターきさらぎ」が「通い」を前提としており、「自宅にいるのと変わらない」ことを強調した。

「そうね、その日のメンバーにもよるけれど、足立さんのお宅には朝九時頃お迎えに上がって、夕方四時前後にお送りできます」

「何か、もう決まったみたいね」

母の公代は良之介と秀子を交互に見ながら言った。

「まだ決まった訳ではないのよ、お母様。お母様のご意志で決まります。ただね、今泉さんがぜひ説得してほしいと言うので、伺ったんです」

良之介と秀子は目を合わせたが、うなずかなかった。二人とも十分に母親の目を意識していた。二人が持ち出した話ではないのだから、そのところを変に勘繰られては困ると思ったからだ。

「実はね、正直なところ、今泉さんが誘ってくれたことも大きな一因ですが、私どもも商売なの。先週と先々週で、利用者さんが三名退所してしまったの。で、利用者さんの開拓ということもあるのよ」

山上房子はあっけらかんと言った。その言葉で公代を含めた三人はそれぞれ救われた。

「そういうことだったの？ 私はまた、この二人が画策したのかと思いましたよ」
公代はそれでも笑顔で言った。

（あれ？ いつの間にか両手を膝の上に置いている）

秀子はそう感じた。秀子がそう感じた通り、房子の巧みな勧誘と、何より今泉真知子からの誘いが母親の気持



ちを動かした。

「ありがとうございます、お母様。今泉さん、きっと大喜びよ」

山上房子はそう言い残して帰って行った。

そして一ヵ月後、母の公代は「要支援2」の介護認定を受けた。二年前に「加齢黄斑変性症」の診断を受けていることが基準になったのかもしれない。

良之介は妹の久美子に、母が「ケアセンターきさらぎ」に通うことになった経緯を電話で話した。妹は現在浜松市に住んでいて、二人の息子たちも結婚して、近所に居を構えている。それぞれ男の子が一人ずついる。

「これで少しはお兄ちゃんもお姉さんも羽を伸ばすことができるわね。良かった」久美子は言った。そして翌週の土曜日に「やっぱりお鮎を食べたくなった」と、夫の要一と一緒に来て泊まっていた。

「義兄さん、久美子とも話したんですが、ケアセンターへの宿泊だけでなく、お義母さんに我が家にも何日か泊まっていただければ、お二人で気兼ねなく京都にも金沢にも行けるじゃないですか。なんなら海外でもいいですよ」

要一が言った。

「ありがとう。泊りの旅行もしてみたいな」

「ぜひどうぞ」

要一は大きなお腹をポンと叩いた。

いずれにしても母の公代は「ケアセンターきさらぎ」に週二回通うことになった。しかし、良之介と秀子の生活はほとんど変わらなかった。その火曜日と木曜日は、「ケアセンターきさらぎ」の車が朝九時に公代を迎えに来て、午後四時頃送ってくる。その都度階段で手を添えてやらねばならない。だから今まで通り、一週間を通じてどっぴりと家を空けることはできなかった。

「ぜひ泊りの旅行をして下さい。我々でお義母さんをしばらく預かりますから」

と言ってくれた要一が、脳梗塞を起こし入院したとの連絡が入ったとき、母の公代も一緒に浜松市の病院に見舞った。ただ、公代はなかなか病室に入ることができなかった。廊下の長椅子で久美子に支えられていた。ようやく病室に入ったのは十分後だった。医療機器に囲まれている要一を見て、

「要ちゃん、こんなになっちゃって」

と一言言った。それを聞いた久美子は、

「お母さん、要ちゃんは死んだ訳じゃないのよ。治療を受けているの。私がきつと元気な姿にしてみせるから」と気丈に言った。

一ヵ月後、要一は退院という運びになった。ただ、歩くには久美子の介添えが必要だったし、言葉もはっきり分からなかった。

その年の暮、良之介が「年末の挨拶に伺う」との連絡を入れたところ、久美子は断ってきた。通院したり、保険の請求をしたりで忙しい、というのが理由だった。年賀状も来なかった。良之介は心配しながらも、

【三月中旬に母と三人で伺います。要ちゃんは近頃どんな様子ですか？】とメールした。

【健常者には分からないと思いますが、夫は夫なりに必死で自立しようと頑張っています。先週は散歩の途中、二回も喫茶店に寄りました。でも、まだ人とお話してできるだけ回復していませんから、お見舞いは結構です】との返事があった。良之介は『健常者』という表現が気に入らなかつた。健常者とは「障害が無くて健康な人」という意味だが、妹が使う『健常者』は、ひねくれた、きつい言葉に感じた。「皆さん」という普通の言葉でいいじゃないかと思つた。

「久美ちゃん、苛立っとるのよ」

と秀子が言う。



「相当厳しいんやと思う」

「でも、自宅療養だろ。酸素吸入や点滴などはやってまい」

「そうではなくて、食べさせたり、散歩させたり、お風呂に入れたりすることが、久美ちゃんの身体に応え始めているんやと思う」

ゴールデンウィークの見舞いも断られた。母の公代が電話をした。時々返事をしながら良之介夫婦を覗き見していた。それにしても、電話をかけている姿は、とても重要な話をしているようには見えなかった。笑顔もなく、しかめっ面もなく、もちろん涙もないし声色も平常だった。

「久美子はね、ずっと泣いていたよ。要ちゃんのリハビリが、なかなかうまくいかないらしいね」

とだけ二人に話した。受話器を柱にある本体に掛けて、自分の部屋に入ってしまった。しばらくして戻って来て、「良之介、あんたも久美子のところに電話してやってちょうだい。それから秀子さん、明日は頼みます」と言った。

「大丈夫よ。車は九時前に来てくれるから。朝食はいつものように八時よ」

「はい。ではおやすみなさい」

母の公代は再び部屋に入った。チーン、チーンと鈴りんが響いた。

「明日って、『きさらぎ』のことか？」

「そうよ。歯ブラシのブラシ部分が広がってきたので、新しい歯ブラシを持って行くことになったの」
「お袋もよく覚えていたな」

秀子は台所で、昨日買ってきた新しい歯ブラシに熱湯をかけた。こうするとブラシに腰がでるらしい。

「おばあちゃんね、記憶力は凄いのよ。計算も強いし、早いよ、八十七歳よ。そしてね、『きさらぎ』では『お嬢様』って呼ばれとるらしいよ。生まれついてのお嬢様だから、きつと言葉とか仕草に現れとるんやね」

「お嬢様はいいとしても、我々もせめて計算くらいはそうありたいな」

「自信ないな」

秀子は肩をすくめた。

ただ、この頃「お嬢様」には軽い異変が起きていた。山上房子が家に寄ってくれた。

「お母様だけだね、実は最近、二回ほど意識を失ったことがあるの。最初は眠いのかなと思ったんだけど、顔が青くなったのよ。お宅ではどうかしら？」

秀子も良之介も母から「今日は『きさらぎ』で意識を失ったよ」とは聞いていない。まして家の中で倒れた様子もない。もし倒れたなら、ドスンという音が聞こえるはずだ。

「倒れたことはないと思うわ」

秀子が言った。

「そういう音を聞いたことはないし、お風呂場まで一緒に行くけどアザは見えないもの」

「そうね、『きさらぎ』でもそういう報告は受けてないわね。でも、これ、もし軽い脳梗塞だとしたら、これから倒れ易くなるわね」

そんな話を聞いてから、母の公代が家にいるときは、さすがに良之介夫婦も物音に敏感になった。

公代は家では倒れることはなかった。が、「ねえ、山本医院に連れて行ってちょうだい。めまいがするの」とか、「山本さんに、やはり行ってみるわ。心臓がバクバクするもの」などと、山本医院に通院することが多くなった。また、三年前に公代が「加齢黄斑変性症」の診断を受けて以来通っている、栗田眼科医院からも、「公代さんは、気分が悪いとおっしゃって、今ベッドに寝ておられます。お迎えをお願いいたします」との連絡も入った。そして、「脳とか心臓を詳しく診てもらった方がいいですよ」という助言も受けた。

山上房子からも、逐一ではないが気分が悪くなったり、めまいがしたり、意識がなくなったりしたので、こういう対処を行ったという連絡が多くなってきた。



しかし、家では何ともないのである。山本医院に駆け込んでも、その帰りには自分から車に乗り込むし、家の階段も秀子の手は借りるもの、すっかりした足取りなのだ。

「家では、きっとお二人がいるから、何の心配もなく暮らせるといふことでしょうね」と、山上房子は言う。それには良之介も秀子も答えなかった。

『エピソード① 「歩け！」』

良之介の父の弟が肝臓がんで亡くなったときのことである。通夜も葬儀も菩提寺で行うことになった。良之介の家からは歩いても十分で行ける距離だが、通夜の日は夕方から激しい雨になった。篠突く雨だった。菩提寺は昔からのお寺なので特に駐車場を設けていることもなく、寺のわずかな空き地に駐車させる。せいぜい六台か七台だ。葬儀社や親族の車が占領していることは間違いないので、乗用車では行けない。

元々が歩くつもりでいたが、この雨では歩けない。良之介がカーテンを開けて空模様を見ながら、「これじゃ、とても歩ける状態じゃないな。もう少し様子を見るか」と秀子に言った。

「時間も心配だからタクシーを呼ぼうよ」

そう秀子が答えたとき、

「歩け！」

と、母の公代が大声を出した。しかし、良之介にも秀子にも顔を向けてはいなかった。

「歩けて？ この土砂降りの中を歩けて言うのかよ！」

良之介は怒鳴った。母親に怒りを込めて怒鳴るのは初めてのことだった。公代はそれには耳も貸さずに、「よいしょ」と言ってソファから立ち上がり、自分の部屋に入ってしまった。

「人が困っている時になんだ！ 何が『歩け！』だ！ 俺はいつも医者を送り迎えをしてやっているじゃ

ないか！」

夫の怒りは収まらない。その「歩け！」と言われた仲間の妻はポカンとしていた。ただ義母の後ろ姿を目で追っていた。

（おばあちゃん、本気で言ったの？ 『歩け！』って言ったのよね、この土砂降りの中を。本気なの？ 息子が真剣に怒っとるよ）

「おばあちゃんらしくないね」
しばらくして秀子は夫に言った。

良之介は一瞬言葉に詰まったが、今度は堰を切ったように喋った。

「あれさ、あれは本心だけ。俺、物心がついた小学校の頃から、そんな経験を何度も繰り返して繰り返して、溺れている人にワラを投げて、しかも一本だけだ。そのワラを本当につかむのかを確かめる、そんな人だった……」

「まさか。私、同居して既に十五年が経つけど、そんな姿は見たことないよ」
「だったら、俺にだけかもしれない」

そう言って良之介は悲しそうに天井を見た。真っ白な天井には、何も描かれてはいなかった。染みさえなかった。しかし、よく見ると影が動いていた。雨が降っているから外は暗いのに、それでも光は入ってきていて、雨の影が映っていた。「すごいな」と良之介は感動すらした。

「天井見るか」と聞こえる。「恐れ入ったか！」と母が言っているような気がする。

「ふん！ 自然の大きさには、お前なんか絶対に敵うものか」
良之介はその母に対し、初めて「お前」と言った。

「ねえ、おばあちゃんは『お嬢様、お嬢様』と言われて育ってきたというけれど、ひょっとすると、その前、つまり前世もずっと『お嬢様』やったかもしれないね」



秀子は腕を組んだ。

「それどころか『お姫様』だ。そうだ『お姫様』だ。何人も何人もかきかかせている『お姫様』だ。だから、一人一人はとても把握できないんだ。俺は、その中のたった一人に過ぎなかったんだ」

良之介は一気にそこまで言って、

「ちくしょう！ 歩くぞ！」
と秀子を促した。秀子も夫の心情が何となく分かったので「はいはい」と言って、傘を持って一緒に外に出た。

「えっ？」と言わざるを得なかった。玄関を出た途端、あれだけ降っていた雨がピタッと止んだのである。そして、これから向かおうとしている東の空に大きな虹が出た。

「おいおい、虹だぜ。こんなにでかい虹を見るのは初めてかもしれない」

「私も、初めてかもしれない」

秀子はなぜか泣いていた。ひよっとすると夫も泣いていたかもしれない。

「ねえ、おばあちゃんが『歩け！』って言ったときのこと、覚えてる？」

「覚えているどころか、絶対に忘れないさ」

「そのあとで、おばあちゃんは何事もなかったように、一人で部屋に戻ったでしょう。今思うと、その頃、ひよっとすると脳の異常が始まっとったかもしれないね」

妻にそう言われると、良之介のフツフツと湧いてきた怒りもしぼんでいく。

「脳と心臓を診てもらおうよ。それとね、認知症もやはり気になるの。とりあえず山上さんに相談しようよ」
母の公代は山本医院で検査を受けた。その結果、

「八十五歳を超えています。記憶力もそれなりに良くて、認知症という診断を出すほどのものではないです

よ。脳のMRIでは多少萎縮が見られます。脳は年齢を重ねると、どうしても萎縮してきます。まあ、そういう部類です。ただ、心臓は不整脈があります。一度詳しく診察した方がいいでしょうね。とりあえず、来週『ホルター心電図検査』をしましょう」

との診断だった。火急なことではないと分かり、良之介も秀子も一応ホッとした。ホッとしたが、ではあの「歩けー」は正気だったのか、という宿題が残った。

「ホルター心電図検査」の結果、「ペースメーカーを埋め込むことも一つの方法だ」と言われた。しかし体力的、年齢的に手術に耐えられるかどうか心配なので、良之介は「NO」を出した。ペースメーカーの件は没になった。母の公代には秀子に「まだまだ大丈夫だそうよ」と言わせた。公代は果たして納得していたかは分からない。

そんな頃、山上房子が「ちょっとお話があるの」と言って良之介の家に顔を出した。公代が「きさらぎ」に行っている間である。

「私の兄のお嫁さん、義姉だけど、『介護付有料老人ホーム』にお勤めしているの。その利用者さんは、個室で暮らすのだけれど、看護師が夜も常駐しているところだから、お母様はその方が安心じゃないかと思うの」と言った。

「でもそういう『ホーム』は順番待ちの方が大勢いるから、なかなか思った時には入れないって聞いたことがあるわ。そして、利用料金もかなりお高いのよね？」

秀子は秀子なりに、英会話の仲間とか、お喋り仲間などに色々聞いているようだ。

「そうね、一部屋借りて、三食付きだものね。ちょっと張るかな。それでね、現在四十七人が待機中ということよ。だからといって諦めないで。とにかく『転ばぬ先の杖』よ。ここにね、申込書と理由書を持って来たから、書き込んでみて。順番は、大きな声では言えないけれど、繰り上がることも、あるわ」

山上房子はそう言って、良之介にめくばせをした。良之介も秀子もおおよその意味は分かった。その日の内に



書いて、明日届けることにした。

【将来のことを考えて、早いうちに申し込みをしました。でも、四十七人の待機者がいるので、順番は来ないかもしれません】

良之介はこんな文章を妹の久美子と、良之介の二人の娘にメールした。

【そうですね、将来のことは分かりませんが、お二人で話されたのなら、それでよろしいかと思います】
妹の久美子からはこのような返信メールが届いた。二人の娘たちからも【それでいいと思います】と、ほぼ同じ内容の返信が来た。

その年は、とにかく暑い夏だった。昨年の今頃、良之介は人と会うのが面倒臭くなって、野菜作りを貸農園から家庭菜園に切り替えたが、それで良かったと思う。朝、野菜たちに水やりを忘れようものなら、昼には葉がぐったりしてしまう。特にトマトは際立っている。完全にしおれたようになってしまう。夕方たっぷり水をやると、朝には元気になって、赤い実を食べさせてくれる。家庭菜園に切り替えてわずか一年だが、毎日顔を合わせることによって、そんな野菜たちの「喜怒哀楽」を感じるようになった。今年はナスがいい具合に育っている。貸農園での経験が生きているのかなと、良之介はうなずく。

秀子は、

「今年も美味しい野菜を食わせていただいたわね。感謝、感謝」と言いながら、ミニトマトを三つ四つと摘まんで口に入れる。

「今度は何を植えるんやった？」

「大根と、こかぶさ」

「去年はこかぶが今一つやったね」

「抜き菜を失敗した。どうしても思い切って抜けない。優しい性格だから」

「私やったらいいかもね」

「うん、うらやましい性格だ」

とは言え、秀子は手伝うつもりはないようだった。

『エピソード② 女王と男爵』

「ねえ、提案があるんやけど」

妻の秀子が段ボール箱を持って、良之介のところに来て来た。

「実はね、明日あたりホームセンターで、ジャガイモの種イモを買ってこようと思ったんだけど、代わりにこれダメかな？」

箱には十個以上のメークインが入っていた。もちろん食料としてスーパーマーケットで買ったものだ。

「食べるのを忘れとったの」

「芽が出ているじゃないか。ていうか、芽だらけだ」

「そうなの。ジャガイモの新芽には毒があるっていうから、捨てるしかないのよ。でもね、種イモの代わりに、これを植えることできんかな？」

「これは食用で、種イモじゃないんだろ？」

「ダメかな？」

「うーん。分からないな」

「ホームセンターの人に聞けば『絶対ダメ』って言うよね。向こうも商売やから」
秀子は段ボール箱の中のメークインを愛おしそうに見ている。

その姿を見て良之介は決心した。

「よし、やってみよう。家庭菜園だから何でも有りだ。オーケー、やろう。種イモ代をケチる訳じゃない



けど、試しにさ。何個？」

「実はね、メークインはここに十四個だけど、もう一つの箱にはダンシャクが七個残っとるの。そっちも芽だらけ」

もう家庭菜園を始めて七年目に入った。三年ほど前から秀子も手伝うようになり、更に菜園日誌を作り始めた。品種ごとに、種を撒いたり苗を植えたりした日、値段、その途中経過、最初の収穫からいくつ取れたかなど、その都度写真を撮っては貼って作っている。

「このジャガイモの写真を撮っとくね。うまく育ったらめっけ物なものね」

秀子はそう言いながらメークイン十四個、ダンシャク七個を玄関の階段に並べた。

「かなりしわくちゃんになっとるけど、さすがに春の陽射しを浴びると、まだまだ頑張るぞって言っとるみたいやね」

「うん。大きく美味しく育ててほしいな」

良之介は鍬を持って、畑の土を起こした。

「昨年一昨年も十六個植えたんやね」

秀子は菜園日誌を見ながら言った。

「二畝しか取れないからな。今年は二十一個だから、かなり間隔を狭めないといけない。きついけど頑張ってもらおう」

良之介はそう言いながら小型スコップで深さ二十cm程の穴を掘った。肥料として鶏糞を入れ、土を被せる。そしてまずメークインをその上に埋めた。その動作一つ一つに、秀子はデジカメのシャッターを切った。

「これ、菜園日誌にも書き込むけど、今、ふと『今年のジャガイモ』という題で、別冊を作ろうと思ったの。別冊の価値があるわ」

食品庫の隅で見つけたメークインとダンシャクがどうしても愛おしい、だからストーリーにする、と秀子

は言うのだ。きっと文房具店に走って、それらに見合ったワッペンやシールを買い揃えて、ワクワクしながら作るのだろう。そんな様子を良之介は想像した。

「だったら、映画の『スターウォーズ』の様に、エピソード編を作ったらどうだ」
良之介は思い付きで言ってみた。

「そうやね。さしずめ『エピソード(1) ジャガイモ編』かな？」

「それじゃあ、そのままだ。メイクインは女王だし、ダンシヤクはそのまま男爵だ。『エピソード(1) 女王と男爵』というのはどうだ？ 色っぽいじゃないか」

「いいかも。もらっとくね、そのタイトル」

秀子は(なるほど、そうやって考えるのね)と感心した。その夫はまだ「フフフ」と含み笑いをしている。(このタイトルがよっぽど気に入ったんだ、夫にはいつも遊び心があるからな)と秀子は夫にカメラを向けた。撮りたくなった。夫を撮ってみたかった。

結局、要一は妹の久美子の介護、看護も空しく、倒れてからほぼ一年後の十月に亡くなった。その日、良之介夫婦は五年振りに京都に行っていた。二条城近くのホテルを取った。そこから先斗町に出て、「京会席料理」を楽しむ予定でいた。母の公代は「きさらぎ」で二泊することになっていた。

良之介夫婦がホテルを出て、ゆっくり三条通りを歩いていたら、久美子から電話があった。六時過ぎだった。すぐにタクシーを捕まえ、ホテルに引き返した。タクシーの中で妻の秀子に掻い摘んで話をした。浜松には二十一時前に着いた。遺体は既に自宅にあった

妹の久美子は玄関で秀子を見ると「ワァー」と言って抱きついた。

「わたし、要ちゃんに、要ちゃんに何もしてやれなかった」と、切れ切れに言いながら泣きじゃくった。



「何言っとるの。一所懸命やっとなったがね。みんなが知っとるよ」
久美子は、今度はイヤイヤをする。

「頑張ったよ。要ちゃんも、感謝しとるよ。ねっ？」

秀子は右手で軽く久美子を支え、左手でその背中をさすっていた。

「お袋、親父に会ってもらえや」

長男の透が、しばらくしてから口を出した。

そして良之介に、

「おじさん、せっかくの時だったのに申し訳ありませんでした」

と、声を掛けてきた。

「何の何の。要ちゃんは、急だったな」

「朝の十時過ぎに病院から電話があつて。お袋と駆け付けたけど遅かった。昨日はお袋だけが見舞いというか、付き添いをして。だから最後に二人だけで過ごせて、せめて良かったかなと思います」

と言った透の横顔は、ほとんど父親の要一だった。良之介はその顔を見て、そして玄関に現れるタイミングを見て、間違いなく要一の立派な跡継ぎだと思った。

「そうか。せめて要ちゃんが最後に会っていたのは妻の久美子だった、ということなんだな。それはそれで良かったな」

しかし、良之介夫婦も母の公代も、葬儀には出席できなかった。

「要ちゃんから『家族だけで』と言われているの」

「……」

「ゴメンね」

「じゃ、せめて通夜だけでも出席できないかな？ お袋も要ちゃんに会いたいだろう」

「ダメよ。要ちゃんに言われているから」
久美子は頑なだった。ずっと下を向いて、首を横に振っていた。あとで透が良之介と秀子に、「御免なさい」と頭を下げた。

母の公代は、一日早い良之介の迎えに怪訝そうな顔を見せた。良之介たちは今回の京都市行きには、それでも遠慮して一泊二日にした。一日目、すなわち昨日だが、母を送り出してからの出発になるので、静岡駅からひかり号に乗っても京都駅には昼前後の到着になってしまう。だから二日目を目一杯使って、その夜帰ることにした。そうなると母の十六時の「お迎え」に対応ができないから、母はもう一泊することになる。特に嫌な顔もしなかったし、色々な説明をするのが面倒くさいので、良之介はあえて何も言わないで決めた。

母は「どうかしたの?」とは聞かなかった。「おや?」と言ったきりだった。昼前に「きさらぎ」には電話を入れておいたから、当然母にもその話がいっているはずだった。

「実は要ちゃんが亡くなったんだ」

「えっ、要ちゃんが? まあ気の毒に……。倒れてから一年か」

「うん、昨日京都にいた時に電話があつてさ」

と良之介は言ったが、母はそれに返事をすることもなく、ただブツブツと独り言を言っていた。それが要一への鎮魂なのか、娘の久美子へのお悔やみの言葉なのか、はたまた良之介夫婦のことについてなのかは、聞き取れなかった。それにしても「倒れてから一年か」と言ったのには良之介も恐れ入った。秀子が「おばあちゃんね、記憶力は凄いのよ」と言っていたことを思い出した。

「ところで葬儀は明日なの? 明後日?」

「通夜が今夜で、葬儀は明日だそうだ。でも、式への出席は断られた。家族だけで済ませてくれ、というのが、要ちゃんの生前の願いだったようだ」



「だとしても、せめて久美子の兄なんだからさ、出ておやりよ」
「粘ったがダメだった。余りにも頑なだった。それに香典も供物も何も要らないからと、これも頑なに断られたよ」

「頑固だね、あの子も。それでは後で電話でもしてみようか」
と言った母の公代だが、結局、自分の娘に電話をかけなかった。

「電話はしたんですか？」

と秀子が聞いても「してないよ」と言うばかりであった。良之介も昨日、今日と、あれだけ頑なに断る妹に対し、多少腹が立っているから、あえて電話もかけなかったしメールもしなかった。だから、浜松から帰った後の様子は、良之介たちも久美子たちも、お互いに相手のことを何も分からない状態だった。

十一月半ば、「四十九日の法要」について、秀子がたまりかねて電話をかけた。

「どうだった？」

良之介が聞く。

「来ていらんと。『赤ちゃんがあくまで家族ですべてを行ってくれと言ったから、そのようにします』と。『だったら、せめてお花だけでも供えさせて』と言ったけど、『本当に何も要りません。本当に家族だけで行いますから』って言っとったよ」

秀子はほぼ棒読み状態で喋った。

代わりに久美子の長男の透から二人にメールが入った。

【母から聞いたと思いますが、来週土曜日に父の『四十九日の法要』を行います。母も、父の二人の姉から、この法要についての出席を請われましたが、『主人の言ったことだから』と断っています。申し訳ありませんが、自分、母の気持ち収まるまで、そんなお付き合いをお願いします】

良之介と秀子は納得して、同時にうなずいた。そして良之介は透に、

【妹のこと、よろしく頼みます】
と返信した。

「いつも『ママはどこ？』ってピーピー泣いとった透がね。随分立派になったね」
秀子が懐かしそうに言った。

そして一年が経ち、要一の一周忌が近づいていたが、「四十九日の法要」同様、妹の久美子からは何の連絡もなかった。

母の公代は「ケアセンターきさらぎ」に通わない日は、家の中でボーッとしていることが多くなった。

「おばあちゃんね、今日なんか、部屋が寒くなっているのに窓を開放して、脇息にもたれて、うつらうつらしながらラジオを聴いていたのよ」
と、秀子が言った。

「秋の日は釣瓶落とし、とって、あつという間に陽が落ちて寒くなるからな」
良之介が言った。

「だから、『おばあちゃん、寒いでしょう。エアコンを入れるね』って言って、立たせようと脇に手を入れたら、身体が冷たいの。冷え切っていたのよ。『大丈夫？』って聞いたら、『平気だよ。何ともないよ』って言って歩き始めたけど、不思議な感じやったよ」

「ねえ、久美ちゃんからの『お願い』に、返事をしなくてもいいの？ もう四日も経つとるでしょう」
と、秀子が声を掛けてきた。良之介は、玄関の二段ある外階段に腰を下ろして爪を切っていた。陽は出ているものの、三月半ばにしては寒かった。まだまだセーターを脱げないかと、思った。パチンパチンと爪が飛ぶ。セーターの網目の中に四つや五つは入っている。靴下にも二つ飛んでいた。



「うん。どうしたものかな？」

「私はどっちでもいいよ」

「気はあるんだが。余り進まない」

四日前にその「お願い」メールが届いた。

【お久し振りです。お元気ですか？ 車でなら一時間ちょっとの距離なのに、なかなか会えませぬね。透の次男の不二弥が時々遊びに来てくれるので、今はそれが一番の楽しみです。二歳になりました。片言を話すようになり、私のことは『パーちゃん』と呼んでくれます。『バーちゃん』ではなくて『パーちゃん』です。パとバの違いにいつ気が付くのかな。それも楽しみの一つです。

ところで、前置きが長くなりましたが、要一さんが亡くなって、早くも六年。今年は七回忌の法要を九月に予定しています。そこでお願いがあります。法要の前に要一さんのために、ハワイのワイキキに行って『散骨』をしたいのです。要一さんはハワイが大好きだったし、何よりそこは私たちの新婚旅行の場所です。だから大好きなハワイに連れて行ってやりたいと思いついたのです。秀子さん共々一緒に行ってもらえませんか？】

随分長いメールだった。こんなに長いのなら途中の「ところで」からでいいのに、と良之介は思ったし、できればメールではなくて手紙をしたためてほしかった。また、妻のことをわざわざ「秀子さん」と書くところが気に入らなかった。ずっと「お姉さん」と呼んでいたのに、良之介への言葉としては「秀子さん」と言うようになった。

秀子は、そのことについては気にしていない振りをしているが、拒絶とまではいかなくとも、「不認」的な事感と感じている。

久美子の夫の要一が亡くなったとき、秀子の胸で泣きじゃくっていた。要一の二人の姉にはそういう態度は示さなかった。それは、二人の義姉がどうのこうののではなくて、「実家」という「くくり」の中での出来事だった。当時、父親は亡くなっていたが、母と良之介夫婦がいて、久美子にとってはずっと居心地のいい「実家」

であった。

「お鮎を食べたくなったの」が決まり文句で、年に三、四回泊りに来ていた。そして、母と一緒に部屋で寝た。

「お姉さんは名古屋のご実家に帰ることはないの？」

「そうね、父も母も亡くなって、兄夫婦がいるだけだから『実家』という感覚はもうね、薄れとるの。先月も、父の命日に私たち二人で緑区鳴海町のお墓に寄って、お線香を手向けてきたけど、そのまま『実家』には寄らずに帰って来たし、そんな感じやね、最近は」

「そうか、ご両親のどちらかがご存命なら、励みにもなるわね」

「だから、今はここが『実家』やね」

「私も、ここにはお兄ちゃんがいる、お姉さんがいて、すごくくつろげるの。そういうこともあって、清水にはちよくちよく足が向いちやうのよ」

「どうぞいつまでも来てちょうだい。そして大好きなお鮎を食べようね」
こんな蜜月の時もあったのである。

「どうなんだろうな、ハワイは」

そう言って、良之介は立ち上がり、セーターをハンカチでパタパタとはいたたいた。そして、

「ハワイというのは魅力的だな。それに『ハナウマ湾』で泳ぐチャンスじゃないか」と続けた。良之介の問いかけに秀子は、

「そうやね、私の夢やものね『ハナウマ湾』で泳ぐことは。でも、今回の行く理由がね、そういうことやし、私が泳ぎたい『ハナウマ湾』とは違うような気がする」
と、他所事のような返事をした。

「ところで、他の国に行って散骨なんかできるのか？　そもそも、お墓から骨を持ち出してもいいものなの



かな？」

良之介は率直な疑問を言った。

「久美ちゃんね、要ちゃんの遺骨を全部骨壺に入れて、自宅の仏壇の戸棚に納めとるのよ。でね、毎年、誕生日と命日には骨壺のふたを開けておくそうよ」

この話は長男の透からの情報らしい。

「手元にあるから散骨できる、ということか。しかし、お墓に納骨をしないなんてな。あんなに立派なお墓があるのに。ご先祖様は何て言っているのかな？ きっと、ご両親だってそうだよな。『おいおい、何で息子を、要一を入れないんだよ』って、夜な夜な現れるかもしれないぞ。それをハワイに散骨してしまったら大変なことになるぞ。そんなことには関わりたくないな、俺は」

良之介は話をどんだん飛躍させていく。

「散骨ってね、多分ね、ほんのひとつまみの骨を撒くことやと思うの。ワイキキの浜を歩きながら、それとなく撒くんやろうな」

「なんだ、そういうことか。じゃあビニール袋にでも入れて持って行けばいいのか」

「多分ね」

「その程度なら、成田でもホノルルでも、特に怪しまれることなく、通過できるだろうけど、やはり後ろめたいな」

「そうやね」

せっかく、初めての「夢のハワイ」に行くのである。主体性を持って行きたい。ついでの「ハナウマ湾」では嫌だ。秀子はそのような気持ちになってきて、

「さっきは『どっちでもいいよ』と言っただけど、やはり行くのは止めにしない？」

と、良之介に「NO」と告げた。

「…だな」

良之介も同調した。

そんな矢先、久美子からメールが届いた。

【旅行会社と相談しました。内容的にも費用的にも、五日間の観光ツアー（約十八万円）で行くのがいいようです。最初の日は午後三時にホテルにチェックインします。そして、その後は、夕食までフリータイムなので、その時間を使って散骨を、と考えています。宜しくお願い致します】

「何て？」

「五日間の観光ツアーで行きたいそうだな。だから、『ハナウマ湾』に寄る暇はないな」

良之介はそれで踏ん切りがついた。

「実は、この冬にドイツ旅行を計画しています。しばらく、ハワイ旅行と比較して迷っていましたが、年金生活者の身で、両方は無理です。海外旅行は七十三歳までと思っています。あと二、三年でしょうか。従って、今回はドイツ旅行を優先させることにしました。要ちゃんには申し訳ありませんが、そのところ、お汲み取り下さい」

良之介はこんな手紙をしたためた。

【了解しました。色々ご心配をおかけいたしました】

という返事が久美子からメールで届いた。「私一人で行きます」とも、「別の機会に付き合って下さい」とも書かれていなかった。

「一件落着だな」

良之介が言った。秀子は「うん」と頷いた。

「少しかわいそうな気もするけどね」

と言った秀子の声は涙声になっていた。



実は、良之介と久美子は兄妹でありながらほとんど意思の疎通がなくなっていた。それは、母の公代が亡くなる半年前、つまり「ホーム」に入所した辺りで、要一の一週忌の法要と相前後する頃からだ。

「お兄ちゃんはひどい人ね」

久美子は兄の良之介にそう言った。

「夫が亡くなって打ち拉がれている私に、ええ確かに『ホーム』への申し込みをするというメールはいただいたわよ。でもその後で、私に何の相談もなく、何の感情もなくお母さんまで奪ってしまうなんてね」

しかし、そう言われた良之介はほとんど冷静だった。聞き流したのではなく、妹の感情を捉えていたし、周りの調和も捉えていた。

母が、「ケアセンターきさらぎ」でも気を失うことが増えてきた。そんなとき山上房子が、

「義姉のところまで、再来週、一部屋空くことになったって連絡が入ったの。お母様に入っていただいたらどう？」
と言ってきた。妻の秀子との独断で入所を決めた。その後で母の公代には説明したが、多分自分の最近の様子を見ていて、感じるものがあつたのだろう、母は意外にもあっさりとお願ひします」と言った。

「お袋は施設に入っただけだ。むしろ常駐の看護師がいるんだから、家にいるよりはよっぽど安心だろ」

「入ったんじゃないかと、入れたんでしょ！ お母さんが言っていたわ、『入れられちゃったよ』って。泣き顔は見せなかったけど、すごく悲しそうだったわ」
久美子は涙をためて、それをぬぐいながら言う。

良之介にとっては初耳だった。母は快く了解したものと思っていた。もう、入所してから三週間が経っている。三日前に「今度来るときは、いつもの羊羹を三本ほど持ってきてちょうだい。皆で食べたいから」と言っただけだ。妻の秀子とは、「お袋もここの雰囲気馴染んできたようだな」と話していた。しかし今、良之介の頭は混乱した。それでも妹の言葉に返答をしなくてはならない。

「そう。入れたんだよ。その方が安心だからな」

「何が安心よ。面倒を見たくないだけなんですよ。私は、夫を一年しか見ることはできなかったけど、ずっと付き添っていたわよ」

「そりゃ、お前の伴侶、旦那様だから、それが普通だろ」

「じゃあ、お母さんは伴侶じゃないから、子としては面倒を見なくてもいいと言うの？」

「そうじゃないさ。見てきたんだよ、随分と。でもな、潮時ってものがある。舟釣りでもな、潮の流れを的確に掴むことができた場合は『大漁』だ。それを間違えると『×』ということになる。その潮時だったんだ。俺も秀子も、釣りはもちろん、人間の身体の変調、つまり潮目だが、それは分からない。でも漁師と同じように、身体の変調が分かる人がいたんだよ」

「山上さんて方？」

久美子はしばらく考えてから言った。

「そう。彼女はよく見ていてくれたんだ。しかし、『きさらぎ』は『通い』が主だから、居住はできない」

「家ではダメなの？」

「彼女はこう言うんだ。『家の中でも気を失ったことは何回かあったはず』と。そして『でも、いい具合に正気に戻っていたに過ぎないのよ』とな。また、『家の手摺りにつかまっても、フツと意識がなくなったら、その手摺りが逆に凶器になってしまったという事例もあって、たまたまお母様は運が良かっただけだと思う』と怖いことも言った。そこに『ホーム』の話が来た。それでいいんじゃないかな。お袋にも説明してOKが出たんだからな」

良之介は、いつものように淡淡と言った。

しかし、久美子は兄の言葉を疑っている。そして、義姉の秀子も共犯者だと思っている。

「入れられちゃったよ」と言う母の声が久美子の耳に何度も蘇る。その都度耳を覆う。その繰り返しだった。



久美子はそれ以来「実家」に寄りつかなくなった。もちろん母の葬儀、四十九日、一周忌、三回忌、また、父の七回忌それぞれの法要には顔を出した。が、良之介夫婦とは、通り一遍の挨拶だけで、その場その場では、ついに打ち解けることはなかった。長男の透夫婦がただオロオロするばかりだった。

久美子からの年賀状も絶えて久しい。それにも関わらず「散骨のお願い」があった。ひょっとするとそれは、「雪解け」を考えての行動だったのかもしれない、起死回生の策だったのかもしれない、と良之介は今、思う。しばらく考えて良之介は、来年十二月に予定している父の十三回忌の法要を、ほぼ一年前倒しして、来年三月の母の七回忌の法要と一緒に行おうと決めた。妹は父親っ子だったから、そのことについてはわだかまりもなく、今度こそ素直に参列できるはずだと、考えたのである。「優しいな、俺は」と良之介は独り言を言った。母の「入れられちゃったよ」という言葉については、直接聞いた訳ではないが、「歩け!」と同様、かなりの大きさ、かなりの重さで、もう二度と開けることはないであろう良之介の心の引き出しに仕舞われた。

なお、捨てられる運命にあったジャガイモの「女王と男爵」は、見事に成長し、実をギッシリ付けていた。秀子が小ぶりの芋を選んで、塩茹でにしてくれた。これがまた、なんとも旨かった。

了